新田次郎全集

第十六巻

新田次郎全集 16

武田信玄（二）

新潮社版

武田信玄（二）
新田次郎全集第十六巻
昭和四十九年十一月二十五日発行
昭和五十三年九月十日八刷
定価一一〇〇円
著者　新田次郎
発行者　佐藤亮一
発行所　新潮社
東京都新宿区矢来町七一〒162　振替東京四―八〇八
電話　業務部03（266）五一一一　編集部（266）五四一一
印刷　株式会社金羊社
製本　神田　加藤製本
© Jiro Nitta, 1974, Printed in Japan
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

林の巻（承前） 5
火の巻 195

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

武田信玄（二）

林の巻（承前）

佳人逝く

天文二十四年（一五五五）十月十九日諏訪から湖衣姫重態を知らせる走り馬が川中島大塚の本陣についた。その手紙を追いかけるように、里美の方から手紙が届けられた。

「お館様にお叱りを受けるかもしれませんが、北の方様のおすすめもあり、恵理どのとも打ち合せた上、私はいま湖衣様の病気のお見舞に来ております。湖衣様は見る影もないほどお痩せになっておられますが、気持はしっかりしていて、お館様のことのみ案じられておりまする。死の足音が、すぐそこまで近づいているというのに、いささかの乱れもなく、なにもかもきちんと身のまわりをととのえられて、その日を待っている湖衣様を見ると、こらえている涙がついに出てしまいました。その私を見て、湖衣様は、里美どの、なにを悲しむことがございましょう、人間はいつかは死ぬるものです、その早いか遅いかということで、それほど嘆かれることがどこにありましょうと申され、かえって私がなぐさめられるような始末でございました。戦陣の中にいるお館様のお心を乱すような手紙をさし上げて悪いことだとは知りながらも、もし、かないますことならお館様のお姿を、もう一度だけ湖衣様にお見せしてあげたいと思いまして、この手紙をしたためました。……」

里美の手紙には湖衣姫の病状のほかにはなにごとも書かれてなかった。心から湖衣姫に同情を寄せているようであった。

晴信は里美の手紙を何度か読みかえした。北の方様のおすすめもあり、恵理どのとも相談してなどと、ちゃんと、正室の三条氏、側室の恵理の顔を立てているあたりはいかにも里美らしい心の配り方であった。医師立木仙元の手紙にはここ数日のうちに死が訪れるだろうと書いてあった。仙元の手紙と里美の手紙をつき合せると、いま諏訪で、湖衣姫がどのような病状にいるかがよく分った。

晴信は音の立たないように手紙を巻きおさめて、牀机から立上った。淋しい顔や悲しい顔を家来たちに見せたくなかった。長陣で、人々は神経質になっていた。めったなことで、総大将が感情を外に出してはいけないのである。

晴信は枡型陣地の上に組み上げられた櫓の上に登っていって、犀川を越えて向うの敵の陣地に眼をやった。すっかり秋になっていた。ここに来たときは、木々の若葉が匂う

ころだったが、その葉は落葉し、河原のススキの穂は吹く風に白く波立っていた。景色全体が晩秋のうれいの中に沈んでいた。いつ雪が降って来てもいいように、つめたく澄んだ青い空には、あれほど飛び群れていた赤蜻蛉の姿をもう見ることはできなかった。

敵陣には異常はなかった。いつものところに、いつもの旗が立ち、いつものところに、いつものような足軽が物憂げに立っているのが見えた。晴信は敵陣から眼を少しずつ右に廻し、やがて、南の方に正対すると、祈るような気持で眼をつぶった。

(湖衣姫死んではいけない。生きていてくれ)

とても、そう願っても無理だろうけれど、できることなら去年の春、駿河に出征したときのように、症状が持ち直して欲しかった。

晴信に従って楼に登って来た馬場民部と飯富三郎兵衛(後の山県昌景)のふたりには晴信のところに諏訪から二通の手紙が来たというだけで、晴信の心になにがあるか分っていた。民部と三郎兵衛は晴信がやるとおりに、身体の位置をかえながら、おし黙っていた。南の方から、走り馬が一騎、土煙りを上げながら来るのが見える。晴信はそっちの方へ眼を凝らした。或いは湖衣姫の訃報かと思った。だが馬は一騎であり、それほど遠いところから来たようには見えなかった。

三人が楼をおりた所へ走り馬がついた。

「駿河の太原崇孚様(雪斎)、今川様御名代として間もなく到着いたします」

走り馬からおりた侍は、片膝立ちの姿で報告した。晴信はその侍に、短いねぎらいの言葉をかけてやって、侍が引き下るのを見て、彼の背後にいるふたりをふりかえっていった。

「雪斎和尚が乗り出して来るとなると和議はきっと成立する。あの坊主は仲裁、調停の名人だ、しかしけっして油断はできない男だ」

晴信の心は戦争に戻りながら、雪斎の調停が功を奏して、越軍との間に和議が成立したら、或いは、湖衣姫の生きている間に諏訪へ帰ることができるかもしれないと思った。

「雪斎がここへ来て、甲越両軍の言い分を聞いての上で、調停案を持ち出すまでに、こちらでも心の用意をして置かねばなるまい」

晴信は馬場民部と飯富三郎兵衛にそれとなく越軍との妥協案について構想をねるように言った。

太原崇孚こと雪斎は二十騎ほどの家来をつれて、その日の夕刻晴信の本陣大塚についた。

太原崇孚は僧でありながら僧衣を着ず、折烏帽子直垂に

小袴をつけて馬にまたがっていた。肥満型の大男で、ぎらぎらと光る大きな眼をしていた。主人がそんな姿なのに彼が率いて来た二十騎は武装しているから、時代を五、六百年昔にかえしての王朝時代に、朝廷から地方へ向う役人を守護した一団が宿駅に着いたような観を呈していた。

「二百日の対陣となると、向うにしろ、こっちにしろ戦う意気はなくなってしまっているでしょう。早々と故郷へ帰りたいところですね」

太原崇孚は晴信に会うと、まずそんな皮肉をいって咽喉(のど)の奥まで見えるような大口を開いて笑うと、

「すぐ越軍へ使者をやり、本日ただいま太原崇孚が今川義元どの名代にて調停役として到着したから、明日にはそちらへ伺いたいという旨、お伝え願いたい」

といった。

来ると早々、手を打つべきことはちゃんと打つのは、さすが太原崇孚だと晴信はじめそこにいる武将たちは感心した。この調子だと、すぐ軍議が開かれ、その席上で、いままでの合戦のいきさつを聴取することになるだろうと思ってその準備をしていたが、そんな様子はさっぱりなく、

「とにかく駿河からここまでは遠いこと、遠いこと、いやになるほど遠い、いいかげん、疲れこんでしまったわい」

そして、顔見知りの穴山信友の姿を見かけると、

「信友どの、この地方はいい酒ができると聞いているがほんとうかな」

と話しかけた。

「酒もうまいし、信濃川をさかのぼって来る鮭のうまいのが丁度今ごろ獲れますから御馳走いたしましょう。陣中ですから女はいませんが、そこのところはご容赦いただきたい」

穴山信友はそう答えると晴信の方をちょっと見た。出すぎたことを言ったかなと警戒したのである。

「それはかたじけないな、それでは今宵は、その地酒と鮭をご馳走になりましょうか」

太原崇孚は晴信に誘いかけるような眼を向けると、

「晴信殿、拙僧が来た以上、なにもはや御心配はなくなったと心得られるがいい、ただ、ひとこと前以て言わせていただくと、いまここでは欲張らず先の先のことを考えられることですな」

「なるべくそのように考えましょう」

晴信は穴山信友に、改めて太原崇孚の接待役を命じた。

太原崇孚はその日、大いに接待を受けた。長期対陣で、すべてに窮乏している甲軍の陣営であったが、調停を有利にするためには、やむを得ないことであった。翌朝になった。

そろそろ、起き出して来て、調停についての相談でもある

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

かと見ていると、すぐ酒を所望した。
「いやいや、こんなうまい酒は飲んだことはない、それに、この鮭の美味なること、まず類なしだ」
飲む、食うばかりでなく歌も歌った。大きな声で怒鳴るし、もっと困ったことには、小用を足しに外に出ると、そのままその辺を歩き廻って、ところかまわずごろりと横になることであった。
二日目は暮れて、三日目の朝になっても酒盛りはやめなかった。昼ごろから酒に酔ってふらふらと犀川の方へ出ていって、ここは眺めがいいから、酒席をここへ移せなどと世話をやかせる始末であった。
越軍の方からも、太原崇孚のその酔態がよく見えた。
三日間武田の陣営で飲み明かした太原崇孚は四日目には早朝に家来をつれて、犀川を渡って長尾景虎の陣へ向った。ここでも太原崇孚は酒を飲んだ。むしろ、武田の陣中より越軍の陣中の方が、よく飲んだ。三日三晩飲み明かして四日目に太原崇孚は小姓を一人つれて長尾景虎に面会した。小姓はまだ十二、三の少年で駿河からわざわざ連れて来た者であった。女のように化粧し、薄く御赭(おあか)(口紅)まで塗っていた。
「太原崇孚殿は僧籍の身だというのに、なかなかの美童をおつれですね」
長尾景虎は、太原崇孚がつれて来た美童に見とれながらいった。景虎は寵童(ちょうどう)の習癖があった。景虎にかぎらず、晴信も若いころ寵童がいた。春日弾正は源助といっていたころ晴信の寵童のひとりであった。当時の武将で寵童の癖のない者はひとりもなかった。同性愛という観念は当時では別に異常なことには思われなかったし、そのことに特に不潔感を持っていなかったのである。
「この者は、長谷屋三右衛門と申すものにて、この者の父より、よき主人を選んでくれるようたのまれたものです。目下、今川殿、武田殿、長尾殿いずれにしようかと思案中でございます」
太原崇孚はけろりとした顔で言った。
「それなら、どうかな、余のところへ来る気はないのか」
舐(な)めるような景虎の眼が、小姓姿をした美童にそそがれると、三右衛門はまるで、少女のように赤くなって、恥ずかしそうに身体をくねらせて、太原崇孚の陰にかくれこもうとするのである。髪の結い方も、着衣も、腰の物すべて、武士の卵としての小姓姿ではあるけれど、そこには男というものより、男からはみ出した、異様に変形された媚態(びたい)がのぞいていた。
「実は、晴信様からもそのような言葉がありました」
「なに晴信が、それでなんと答えたのだ」

「なにも答えてはおりません。この者のことは、この私がいっさい任されています」
「では余が貰うてもいいな」
「長尾景虎様は美童を十人も持っておられるというのに、まだその他に欲しいのですか、やはり噂どおり欲が深い……」
「いや欲張りは晴信だ。晴信は信濃の国を隅から隅まで自分のものにしようとしている、あんな欲張りはいない」
「晴信様がどこまでお退きなされたら欲張りでなくなりますかな」
「すくなくとも村上義清の旧領地、更科、埴科の二郡は返してやらねば話にはならない」
「それはちと景虎様の方が欲が深いように思われます。調停者として公平の立場で見ると、二百日対戦となっている現在位置のままで双方が退くのがもっとも合理的に思われます」
「そんなばかなことが、そんなことをしてみろ、余は信濃武士たちの笑い者になる」
「それではこのまま冬を迎えますか」
そう言われると、景虎は言葉につまった。
「いまが退きどきだと存じますが、冬を眼の前にして欲をかけば、損をするのは、越後側でございましょう」

太原崇孚は景虎に向けた眼を動かさなかった。
「だが、旭山城だけはどうしても取りこわしたい。そうしなければ、将来に禍根が残ることになる。いかなることがあろうと、旭山城とりこわしの条件がないかぎり、講和はできない。雪が降れば越後との交通は不便になる。だが、雪が降るのは越後の国境だけではあるまい、雪の深さは違うにしても、信濃から甲州にかけても雪は降るだろう」
「では旭山城とりこわしの条件を入れて、現状の地域配分をみとめる。――これでいいでしょうね」
太原崇孚は声を大にしていった。
「いや、それでは我慢ならぬ、少なくとも、埴科の一郡はこちらへもどして貰いたい」
しかしそれには太原崇孚は取り合わず、
「三右衛門、さあ帰ろう、どうやら、お前の主人は晴信殿の方がよさそうだ。景虎様は欲が深すぎる」
そういって長谷屋三右衛門を帯同して帰ろうとする太原崇孚に景虎がいった。
「その者をここへ置いていくがいい、そうすれば、そちの調停を全部承知しよう」
長尾景虎はそういうと、迷ったような顔をしている美童長谷屋三右衛門の手を取って、彼の傍に坐らせた。
太原崇孚は、その日のうちに犀川を渡って晴信の陣所に

戻ると、有無を言わさず、旭山城取りこわし、現状維持の調停案に同意させると、あとの事務的折衝は駿河から来ている一宮出羽守にまかせてさっさと駿河に帰っていった。

太原崇孚こと雪斎和尚は駿河に帰りついて今川義元に甲越調停成るの報告中に、急に眩をおこして倒れた。それからしばらく、昏迷状態がつづき、彼が死んだのは、閏十月十日であった。

弘治元年閏十月十五日、甲越両将は誓紙を取りかわして兵を引いた。

晴信はその日のうちに諏訪へ帰りたかった。一眼湖衣姫に会ってやりたいと思ったのだが、そうもいかなかった。二百日対陣で失った莫大な軍費と、労力と、そして三百人に近い人間の犠牲を無駄にするかしないかは太原崇孚が言ったように先の先まで考えて軍を引くかどうかということに思われた。晴信は、彼と共に戦ったことによって、その領地を失った善光寺別当栗田寛安と小柴見宮内をつれて、まず小県へ引き揚げることにした。そして栗田寛安が旭山城に奉持して来ていた善光寺本尊を禰津の郷へ移すことに決めた。

禰津の郷は、晴信の愛妾里美の父禰津元直の土地であった。

善光寺本尊が、善光寺を離れて小県に移るということは、善光寺と共に生きて来た人々にとって愛惜きわまりないことであった。本尊不在の善光寺平は、仏に見放されたも同然な土地だと見限って、長年住みついた土地をはなれ、本尊をしたって禰津へ行こうという者が二十人や三十人ではなかった。

犀川の二百日対陣によって、犀川の北は、越軍の勢力範囲になったが、善光寺本尊とともに、人々の心を晴信は見事に奪い去ったのである。

「甲斐の武田晴信様はしばらくの間だけ御本尊を安全なところにお移し申す所存なのだ。それは彼の心ではなく御仏の心だ。御本尊が善光寺別当栗田寛安の夢枕に立ってしばらく戦いのないところへ行っていたいと申されたのだそうだ」

善光寺本尊がこの地を去るのを見て嘆き悲しむ人々に、そういう話がふりまかれた。

「善光寺の本尊を持ち去るとは、けしからぬ、すぐ返して貰いたい」

と越軍から交渉があったが、

「誓紙の中には善光寺本尊のことについてはひとことも触れてはおらない。それに、今度のことは御本尊自身の御心によって決められたものであるから、その点よろしく賢察

せられたい」

甲軍の回答は高姿勢であった。既に本尊は栗田寛安が奉持して陣中にあった。越軍がどうしても取り戻したいのなら一戦を交えなければならない。

「善光寺本尊を敵に渡したということは信濃の心を敵に奪われ、その衣を投げ与えられたも同然なことです。黙ってはおられません、私は軍規違犯を覚悟で、御本尊を奪いかえして来ます」

柿崎景家が景虎に嚙みついた。だが、柿崎と行動を共にしようという者はほかにはおらず結局柿崎は断念せざるを得なかった。

善光寺本尊は坂木、上田を経て禰津の郷に入った。善光寺本尊は小県の庶民に随喜の涙とともに迎えられた。何度晴信がこの地を通過しても、進んで頭をさげようとはしなかった、小県、北佐久、南佐久の農民たちが善光寺本尊到着と聞いて、手に手に銭を持ち、米を持ち豆を持って禰津の郷へおしかけた。晴信にとって思いもかけないことであった。

晴信は禰津の郷、塩田城付近を見廻り、二百日対陣の結果が甲軍の勝利に終ったことを誇示してから、室賀峠を越えて深志城に入った。やはり、戦果を吹聴し、甲軍が二百日対戦後も、ちゃんとしていることを示すためだった。

晴信は深志城に入った夜、幕僚諸将を呼んで、今後いかにして奥信濃を手に入れるかについて協議した。景虎と互いに領地を侵略しないと誓紙を交わして、ひとつきも経たない間に、その誓紙を反古にする相談をするほど、晴信は先を見ていた。

「葛山城を守る落合一族を調略するのがもっとも賢明かと存じます」

飯富三郎兵衛が献策した。

葛山城は今度の二百日対陣で、越軍が旭山城の付城として築いた城である。この城をくだせば善光寺周辺はすべて甲軍のものとなるのである。

「で、その時期は」

晴信の問いに対して飯富三郎兵衛は、

「落合一族は裾花峡谷を根城とする、鎌倉以来の名族、今すぐ誘っても、こっちへなびくものとは考えられませぬ。まず、あの地に通じたる者をやって落合一族の様子をさぐり、一族の中に武田に応ずる者を探し出すのがよいと思います。いまから、調略に取りかかれば、おそらく一年後には葛山城はこちらのものとなるでしょう」

飯富三郎兵衛は自信ありげに言った。葛山城のほかに調略の的となるべき城や人の名がいくつか出た。調略には金と人が要った。だが、敵と槍を交える費用とくらべると、

比較できないほど安価につくことは、いままでの経験であきらかにされていた。

二百日対陣の事後処置がすべて終った翌日晴信は深志城を発った。

(いくたび、この峠で諏訪を望み、諏訪で待っている湖衣姫を恋うたことか)

晴信は塩尻峠に馬を立てて、鉛色にしずんで見える諏訪湖に眼をやった。諏訪湖はそれまで晴信が見たいかなる場合の諏訪湖より憂いに満ちていた。それは憂いを越して悲しんでいる表情に見えた。いままさに慟哭しようとする寸前の、張りつめた相貌に見えた。

晴信は死を目前にしている湖衣姫を思った。間もなく湖衣姫は死んでいくのだと思うと、その不憫さで胸がつぶれそうであった。戦国では人の死は飽きるほど見ていた。そうしている晴信自身でさえも、一すじの矢、一発の銃弾が身体を貫けばそれで終りであった。戦国時代においては、死と同居しているといっても過言ではなかった。それにもかかわらず、晴信にとって湖衣姫の前に死がおとずれつつあると聞くと、その死にはげしく抵抗したかった。湖衣姫を失いたくはなかった。

晴信は一昨年の天文二十二年の春、この塩尻峠を駈けおりて、諏訪にいる湖衣姫の館をおとずれたことがあった。そのとき湖衣姫は侍女に助けられながら、晴信と対面した。それ以来会ってはいなかった。あのときは駈けおりていかねばならないような気持だったが、今はそのときとは違った気持だった。先におそろしいものが待っているような気がした。気はせくけれど、湖衣姫の死というものの前に晴信はたじろいだ格好だった。

諏訪につくと晴信はただちに湖衣姫の館を訪れた。諏訪家から湖衣姫にずっとつき添っていた侍女の志野が晴信の来たことを湖衣姫に告げ、湖衣姫の言葉を晴信に伝えた。

「生けるしかばねとなった私にお会い下されば、このあわれな姿のみがお館様の心の底に残るでしょう、湖衣はお館様がお見舞に見えられたと聞いただけでうれしゅうございます。このうえともない幸せだと思っております。いまの私はただ静かに死を待つ身でございますゆえ、どうか私の心をみださないでくださいませ」

志野は湖衣姫のことばをそのとおり、晴信に告げると声をころして泣いた。

晴信はついに湖衣姫に会わずに古府中へ帰った。二百日間も躑躅が崎を留守にしていたので仕事が山積していた。いったいどれから取りかかっていいやらわからないほどであった。晴信が躑躅が崎へ引き上げて間もなく、木曽へ出兵していた栗原左衛門と多田淡路の軍から走り馬がついた。

木曽義康、木曽義昌父子が降伏を申出たという報告であった。
木曽義康、木曽義昌父子は自ら城を出て甲軍に和を乞うたのである。木曽は二百日間食糧封鎖されたためにひどく難渋していたし、たのむ越軍が甲軍と和睦した以上、木曽ひとりで甲軍と戦う意味がなくなったのである。
晴信は軍門に下った木曽義康、義昌父子を同盟国なみの鄭重さで古府中まで連れて来るように命じた。
木曽から直ぐ返事が来た、晴信あての木曽義康の書状があった。
「古府中に参上せよというおおせではあるが、晴信様のいままでのなされ方を見ている私にとって不安な気もいたします。命がおしいというのではありません、武士として後世に恥をさらすことをおそれているのです。諏訪頼重殿も、大井貞隆殿も古府中にて切腹をおおせつけられました。まだこの他にも同じような運命に会われた人たちがおられます。武士が敵の軍門にくだるということは容易なことではございません、それは腹を切るよりつらいことなのです。その恥の上に恥をさらすようなことになるのは、私としてがまんできないことです。私は木曽義仲公以来の伝統に疵をつけたくはありません。もし晴信様が、私に切腹せよと申されるならばこの城で切腹いたします。降伏した以上そのことは充分覚悟していることでございます。どうか、私の心を汲んで、晴信様のお心をそのままお伝え下さるようお待ちしております」
木曽義康の言い分は堂々としていた。いささかの卑屈さもなく暗さもなかった。
晴信は義康に対して、諏訪大明神に誓って、義康、義昌の生命は保証するから古府中へお出かけ願いたいと返事をした。名誉ある木曽家に対して理不尽なことは毛頭するつもりはない。諏訪頼重、大井貞隆に切腹を命じたのは降伏してから以後、反逆のくわだてをしたからであって、だまし討ちにしたのではない。
晴信はそう書きながら冷汗を掻いていた。
木曽殿、古府中参上決定という通知と前後して湖衣姫逝去の報が伝えられた。
晴信はすぐ諏訪へ発つ用意を命じた。晴信がいかに湖衣姫を愛していたかを知っている家来たちは、それに対して、お慎み下さいなどと、引きとめる者はなかった。
「なんと申し上げてよいやら」
里美が晴信の前でくやみを言った。恵理は里美のあとでなにも言わずに頭を垂れていた。恵理は湖衣姫を知らなかったが、同じ側室の身として、側室の死を嘆く晴信の心がうれしかった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo